

# 白金霞

8月号



平成28年8月発行

第66号

## 白金葭定例会案内

九月十六日（金） 12:00 ~ 15:00 ア工作室兼題… 蠅螂、秋薊

十月七日（金） 10:30 ~ 15:30 吟行句会（駒場公園内近代文学館↓句会場（駒場住区センター第一会議室））

十月二十一日（金） 12:00 ~ 15:00 ア第5兼題… 栗、行秋

十一月一日（火） 法隆寺拝観（夢殿の救世観音）

十一月十八日（金） 第三兼題… 神無月、沢庵漬

兼題句参考句（9月16日分） 蠅螂、秋薊

なすことも無く蠅螂の構え居り 中川芳子

内宮に流れ着きけり子蠅螂 大類準一

新宿は西口で会う疣毛り 小林実

蠅螂の汝にはコントラバスが似合う 大山安太郎

蠅螂は馬車に逃げられし馭者のさま 中村草田男

蠅螂のひらひら飛べる峠かな 岸本尚毅

童子仏濡れてゐるなり秋薊 高木良多

廃屋となりたる湯宿秋薊 北吉裕子

秋薊赤裸の山の照り美くはし 瀧春一

富士を背に草屋根のあり富士薊 初山和子

古墳山のぼれば秋の薊かな 大坪景章

秋あざみ振りむけば海きらきらす 野澤 節子

## 俳窓評論纂

＊彩130号は40頁を使つて佐藤恵子句集の特集号となつてゐる。以前同席した里川水章さんが長い紹介文を書かれてゐる。詩から出発したという著者にかこつけて、詩と俳句について教師調の解説をなされ、宏之助さんと同じく、秋元不死男に入門、その後昭和53年に天狼入門、狩の鷹羽狩行にも投句後、天狼遠星作家として新人賞も受賞して活躍されたとある。平成6年の誓子没後は平野ひろし主宰の彩へ同人参加。私が周りから言われるままに、築港に同人参加した年であつた。本誌の先々月取り上げた「藍甕」に二度漬けし色濃紫陽花」の句から句集名を「藍甕」にされたとあり、天狼の年譜のような句が紹介されてある。誓子先生の一周忌に高幡不動に集つた作家は30人位いたと思うが、追悼句会で、水章さんが忸怩たる思い云々と云われたのを覚えてゐる。最近「集ふ者五人となりし誓子の忌」となったが、恵子さんと宏之助さんなどはその五人の中に居るのであろう。遠星集作家らしい親しみのある句を抜いて紹介にとどめる。

三上池万年雪の端浸る  
登山道遭難の碑が道しるべ  
下山して富士の全姿を目に収む

登山小屋無線アンテナ輪飾す

長病みの母ベッドにて鬼やらふ

吉野山昼見し桜夜も見る

葡萄棚青嶺の青き裾延ばす

山開き早池峰山頂神楽舞ふ

山小屋の雑魚寝窓辺に星満ちて

磯焚火生きたる海星投げ込めり

神鏡に黒き一閃つばくらめ

白帝城峨々たる峰に峰雲聳つ

富士登山星は真実天の花

山小屋の屠蘇受く大き薬罐より

メロン食ぶ介護の我がみんな食ぶ

寝たきりの母も虫干車椅子

双方に勝ち名乗りあぐ泣相撲

居間は兼書斎と客間一葉忌

花御堂枝垂れ桜の樹下に据ゑ

冷房に勝る靈気よ三蹟展

\*山尾かづひろさんと俳誌交換のあすか8月号に久里

浜在住の村上チヨ子さんが久里浜の現代を書かれています。

夕爾の娘さんがお住まいであるので、関心がありました。

運輸省の港湾技研があったり、自衛隊がある街。

\*同裏に子規の東京物語32が掲載されてある。かづひろ

さんの定住文だ。今月号は芭蕉200回忌のことが子規

を通して紹介されてある。いつものことだが、ジャーナリストイックに書かれてある。

\*孝三さんより「歴路」7月号の一部コピーを頂いた。

同誌は合同句集謹呈の倉橋鐵郎さんの結社誌である。

主宰の向田貴子さんの句は

沙羅咲くやかねてここに麻耶詣で

ぼうたんや弥勒の思惟をさまたげず

真間の江に汐の香さして初燕

橡咲いて免れ難く古るよはい

などやゝ主観的であるが心が見えてこれでいいので

はと思いました。倉橋鐵郎さんの「真間暮春」は

拾ひ読む万葉の歌碑真間暮春

水なきに「真間の継橋」暮の春

など市川より手児奈堂への参道の風情がおとなしく

読まれていて好感がもてる。

\*最近知り合った我孫子市の加藤さんから「俳諧かる

た」の資料を頂いた。H 24・12・12の日本経済新聞

に横井士郎氏が紹介した。同氏が連句結社の会員の方

と奥さんの知人の画家の協力を得て、連句の俳諧と付

句を切り離してかるたにしたものだ。連句作者は江戸

時代の蕉門蕪村門一茶門それぞれ26編、11編、11編

合計48編からなっている。発句に付句を選ばれてある。

連句に親しんでもらう便<sup>よすが</sup>に作られたのだ。

## お便り広場（到着順、敬称略）

白金霞頂きました。中の手紙を見ました。十名で予約しました。お弁当（夕食分）適当にお土産に入れます。人数が増えてもなんとかなると思います。当日楽しくなればと思っています。夢殿へ行かれるのですか。すばらしいですね。呉々も御体を御大切にして下さい。

（7・25 小山陽也）

暑中お見舞い申し上げます。梅雨明けと共に厳しい暑さが続いています。白金霞7月号受け取りました。ありがとう。しばらく無音にしています。梅雨明け前には集中豪雨があり、あちこちで土砂崩れがおき通行止めもあつたりで大変でした。災害復旧には時間がかかりそうです。多量の雨のせいと気温の高さで雑草の処理に苦労しています。刈ってもすぐのびてどうにもなりません。朝早くと夕方少しとぼちぼちやっています。6月末に年金友の会で三朝温泉と蒜山高原、鳥取砂丘など一泊二日で行って来ました。皆さん顔見知りばかりで楽しい2日間でした。田植をして間がないと思ってももうそろそろ穂ぐみをしている状況です。毎日元気で農業やゴルフのことに感謝の毎日です。高志も編集や発行など忙しそうですが、あまり一生懸命にならず、少しは気持ちをやつくりと持つて暮らし

て下さい。（中略）まだまだこれから暑が続きます。敏子さん病み上がりです。お体をいといながらゆっくり楽しく暮らして下さい。ご健康心よりお祈りもうしあげペンを置きます。我家の重庫 納庵 撫が果作り

つばめの子掃除大変巢立ち待つ（7・26 健三）

暑中お見舞い下さいましてありがとうございます。五周年お祝い会開催迄、お忙しかったこと、存じ上げます。少しゆつくりお休み下さい。頂いたルリタマアザミの絵ハガキ涼しいそうで、私も前に是非欲しくて入手、毎年庭に咲いて菫んでいましたが、ノコンギクの繁殖にやられ姿を消し残念です。この絵を拝見し久々で嬉しゅうございました。今日白金霞七月号と小山さんの会のお知らせ頂きました。暑中老人が伺えますかどうか思案しております。ポケモンGO！とかで、私などに縁はありませんが、夢中の余りの交通事故も出はじめ怖いことです。おでかけにはお気をつけ下さいませね。日は長くても水やりなどは、四時半過ぎなければ出来ず、夕食支度の時間がすぐ来てしまうのでこの頃夕食は七時になり、アツと言う間に十一時、十二時そして明け易く三時に朝刊が来ます。光成様と二人三脚ますますお元気で。光 みち様（7・26 璃子）

暑中お見舞い申し上げます。皆さまお元気ですか。

敏子さんその後少しは良くなりましたか。気になつても何もできなくてすみません。私は年相応で仕方がないかと考えています。高志さんが云ってくれた様に幸福と思い頑張っています。お体大切に。(7.30 幸子)

残暑お見舞い申し上げます。この度は「白金霞」合同句集をお送り下さり誠に有難うございました。その後、ご無沙汰ばかりで大変心苦しく存じておりましたが、句集を拝見し、ますますご健勝にてご健吟の様子本当に嬉しく存じました。句集は早速通読・再読させて頂きました。浅学の私などが感想を申し上げるのは僭越と存じますが、句あり、エッセイあり、研究論文ありと極めて内容の濃いすばらしい合同作品集であり、お仲間も一騎当千の素晴らしい方々と想像され只々感銘いたしました。良いのものを送り下さり心から御礼申し上げます。感謝の印と致しまして特に感動した十句を以下に記載させて頂きます。

蛤汁のとりみ洛中洛外図  
麦秋の木馬の眼青く塗る

満月ノ影踏ミシマセウモウ一度  
湯たんぽやこの足踏みし山や川

弔句二句

赤マンマ小サキ死出の足袋履ケル  
紅を正さる残暑の棺の中

元旦のきのふと同じ顔洗ふ

はたと二駅乗り過ごしたる秋思

胎内に習ひし形月夜眠る

一茶の背兜太が洗ふ大年湯

秋立つとは名ばかり、暑さはこれからが本番と思われまます。どうか十分ご自愛の上ご健吟下さい。この度が本当に有難うございました。

平成二十八年八月山の日

倉橋鐵郎

飯田孝三様

追伸：誠にお恥ずかしいものですが、私の傘寿記念として作成した句集を同封いたします。ご照覧賜りますれば大変幸いでございます。

残暑お見舞い申し上げます。昨日は遠方のところ熱い想いを行動に移され人生まっしぐらに突き進んでおられるお姿に接しまして私も負けじと奮い起つ一日でした。目指すは簗玉氏ありですね。祐一氏もこれから出品作りに地獄の毎日が来るとのこと。光成さんのパフォーマンス、兄上のそれ、そして遠くりオの地ががんばっている選手の皆さん、熱い今夏に遭遇出来ましたことに感謝しつつ元気でがんばってゆこうと思つています。では又。

(8・11 加納綾女)

近づいてゆけばひまわり高くなる 石井とし夫句

白金葭読ませてもらいました。又別便で感想を送りました。

(8・13 山本百合子)

お暑い折りから福山にて逢えたこと何十年振り市内にて尊兄と歓談の機会を作って頂いたことに感謝しております。楽しい夜をブラブラと老人が歩いたね……。忘れない思い出となりました。ありがとうございます。まだ残暑は当分つきそうですから、どうぞご自愛のほど祈り上げます。先ずはとりあえず残暑見舞いまで。

瓜もみに飽きてしまった大暑かな (8・16 鹿見峯子)

残暑お見舞い申し上げます。写真はがきありがとうございます。受け取りました。久しぶりに先生の顔を見、いろいろな作品鑑賞できて良かった。色々な人と積極的な行動にはちよつと驚きました。二人で食事もできて最高の一日でした。ありがとうございます。まだぐ暑さが続きそうです。無理せぬように。 (8・16 健三より)

残暑お見舞い申し上げます。台風は悪さをしませんでした? お伺い申し上げます。先日は早速に素晴らしい記念の写真をお送り下さいましてありがとうございます。一日ぐを大切に刻んでいきたいと思っております。今回のイベントでした。感動を思い出して次の生命に繋げてゆきます。お礼まで お元気で。

(8.17 加納綾女)

昨日は大変お世話になりました。心からお礼申し上げ

げます。上野の近くに居ながら、初っ端から出遅れ、とんだご迷惑やらご心配をおかけしてしまいました。今更、反省しきりです。お許し下さい。これから何卒よろしくお願いいたします。陽也さんが大変お元気な様子で何よりでした。今年も大変ご馳走になった上、お土産をいっぱい頂戴しました。いつも陽也さんと高志とのご交誼にご相伴させていただき、お礼の申し様もあります。つつい気促な放談に流れ特集号についての感想に触れず仕舞だったのは残念ですが、次の折りもあるでしょう。ご自愛ご健吟を。

(8・22 飯田孝三)

先日は本当に楽しかったですね。光成さんが十月法隆寺へ行かれてから今度は俳人ばかりの会をしましう。そして少しは俳句の話を聞かせて下さい。皆様から御葉書を頂きましたが返事はしていません。今後ともよろしくお願い申し上げます。それにしても会計は大変でしょう、小規模の会社では奥様が会計をやっているところが多いようです。みちさんを大切にして下さい。

(8・23 小山陽也)

ハガキ句70報 (16・8・19 於 梅の花)

俳人と我が名呼ばれん涼新

遅く参じて飲む氷水

夏休背筋伸ばして上野かな

高 幸 敦

風月堂に集ふ八人

極楽鳥の花の館を出て夏帽

初めてのベ―ゼ不忍の丘に

南瓜の実木の枝よりぶらさがる

蟬なき終り休みも終る

み 孝 宏 陽 雅

### ハガキ句70報次第

八月は句会を休み熱暑を凌ごうとしたが、陽也さんの申し出を受けて、懇談会として上野広小路の梅の花に集い、雑談をした。先の合同句集の感想会もしていないので、私はそれに当てようと思っていきましたが、座の雰囲気はそんなものなんのその雑談に終始した。僅かに芭蕉の話が少し出た。芭蕉はわからない、薄情だなど大体否定的な話であった。これに触発されて、今月も私の閑話休題を(2)として書かしめた。右の連句は風月堂に移動して無理して作ったものです。ただ宏之助さんのしつらえで、誓子先生の自筆の俳句軸が床の間に飾られた。句は

一湾の

潮

しづもる

きりぎりす

誓子

と云うもので、この軸の前に極楽鳥花が活けられ、

又料理メニュー紙の題は きりぎりす山口誓子の白金  
葎 平成二八年八月一九日 と書かれてあり、店主の  
心遣いが見えていた。俳句が書かれてある箸置きを使  
うもてなしもそうである。

### 受贈誌 (H 28年8月号)

八月大名天水猫車ねこに溜めしまま(彩130号)平野ひろし

暁ひぐらし夕べひぐらし門跡寺(〃)

鈴虫の発止と髭を差し交す (〃)

鳴かずして鈴虫髭を蠢かす (〃)

ごめ高音瞬くうちに糶終はる(あすか7月号) 山尾かずひろ

彰義隊逃走経路若葉陰 (あすか8月号)

お互いひを振り返りけり夏帽子(東亭ラフ8月)

黒塀の潜り戸よりの船遊び (〃)

かなぶんの青衣が過ぎるLED (〃)

八月やホース干し出す消防署 (〃)

少女らの手足は長し雲の峰 (〃)

こだま

柚の花やひそかに参る疣地蔵(彩130号)

(山尾かずひろ吟行ノートH 28・07・10〜8・17)

江戸前の鮎の放流山深し

川に立ち五体満足鮎を釣る

縄張りを守り守りて鮎釣られ

光成高志

飯田孝三

光 みち

光成高志

菩提樹の緑陰に悟り開かん

〃

## トシのいる場所―宮沢賢治の挽歌群― 武者昭七

一九二二年（大正十一年）十一月の末賢治は二つ違いの妹トシ（二十二歳）を失った。「信仰を一つにするたつたひとりのみちづれ」（「無声慟哭」）と呼んだほどの最愛の肉親であった。「無声慟哭」「オホツク挽歌」などの多くの挽歌がそのあと誕生する。「ああ何べん理知が教えても 私のさびしさはなほらない」（「噴火湾」）と後年まで賢治は歌う。どこかに隠されているトシのありかを尋ねる旅、それを探すが賢治の生涯の旅であった。熱にあえぐトシに「雪のふたわん」をさしだしながら「どうかこれが兜率の天の食に変はつておまえとみんなとに聖い資糧をもたらすことを願ふ」という賢治（「永別の朝」）。「あいつはどこへ落ちようともう無常道に属している」と叫ぶ賢治（「青森挽歌」）にまず僕らは出会う。「兜率天」とは弥勒菩薩のいます天上世界であり、「無上道」とはこの上ない悟りの世界である。トシは仏教的な天上世界に登ったと賢治は確信する。ヤマトタケルの幽魂が白い鳥となって飛び去ったという伝説はよく知られた伝説だけれど賢治も林の中で白い鳥となったトシに出会う。その一節「二匹の大きな白い鳥が 鋭くかなしく啼きかはしながら し

めつた朝の日光を飛んでいるそれはわたくしのいもうとだ 死んだわたくしのいもうとだ 兄が来たのである かなしく啼いている（白い鳥）。

白鳥伝説はおそらく仏教渡来以前からこの国の風土に根差した民族的信仰だった。その伝説にトシが重なる。ここでトシははるかに遠い天上世界ではなく賢治のすぐそばにいる。柳田国男は祖霊は常にこの国土のうちにとどまつて子孫の繁栄を見守っていると説いた（「先祖の話」）。賢治にもそんな民族信仰がやどっているように思われる。大正十二年夏、北海道旅行の帰り、雲をかぶった駒ヶ岳をみて賢治は「そのまっくらな雲のなかに」とし子がかくされているかもしれない」と思う（「噴火湾」）。賢治は「死とはこの世の現象が異空間へ移ることだ」と言い、そのさびしいものを死といふのだと言い「わたしの悲しみにいぢけた感情は どうしてもどこかに隠されてたとし子をおもふ」とうたった。トシは何処にいいのか。トシを探す旅は銀河の果てまで続くのである。

## 芭蕉のかるみ以後の閑話休題（2）

光成高志

芭蕉は奥さんが亡くなつて、「数ならぬ身とな思ひそ玉祭」と詠んでいる。これはないでしょう、薄情だというものである。元禄七年六月に落柿舎で壽貞尼の訃



報が来たのですね。一緒に旅をしていた子の次郎兵衛に手簡を持たせて江戸へ返した。その手簡は左である。

壽貞無仕合もの、まさ・おふう同じく不仕合、とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へ共、急便に而此書狀一所に御覽被下候様に頼存候。萬事御肝煎御精出しの段々先書にも申来、扱々辱、誠のふしぎの縁にて、此御人頼置候も、ケ様に可有端と被存候。何事もく夢まぼろしの世界、一言理くつは無之候。ともかくも能様に御はからひ可被成候。理兵へもうろたへ可申候間、とくと氣をしづめさせ、取乱し不申様に御しめし可被成候。以上

六月八日

桃青判書

猪兵様

伊賀上野念仏寺過去帳二日の「松譽壽貞」が江戸の寿貞と同一人と見られるので、その忌日は六月二日となる。芭蕉はその年の七月十五日に第十一回目の帰郷し盆会を営み

家はみな杖に白髪の墓参

(続猿蓑)

尼壽貞が身まかりけると聞きて

数ならぬ身とな思ひそ玉祭

(有磯海)

山家集に「世をいとふ名をだにもさはとどめ置きて数ならぬ身の思出にせん」があるし源氏物語に「数ならぬ三稜や何の筋なれば憂きにしもかく根をとどめけむ」(玉鬘)や紫式部集に「数ならぬ心に身をば任せぬ

ど身に従ふは心なりけり」など用例はたくさんある。

人の数にも入らぬ身だなどと思うでないよ。玉祭には多くの仏たちと同等に祭られているではないかという寿貞の追善句。静かに語りかける口調に深い味わいと悲しみがこもる。壽貞無仕合ものと芭蕉が書かねばならなかったところにも悲しみがこもっている。俳諧の作品として普遍性を持たせ後世に残したのだ。源氏物語でもそうであるが、歌の実まことこの世の実まことは一致しないのだ。歌を見れば作者の実人生がわかると思つたら大間違い。歌と実人生には断絶がある。決して連続した世界ではない。芸術作品というものはそういうものだと思つて見なければならぬ。芭蕉の俳句が芭蕉の人生を表していると即座に思うのは危険である。西脇順三郎が書いた「芭蕉の精神」(文芸読本 松尾芭蕉昭和53年)を読んで改めてそう思つた。桃青こと若き芭蕉は莊子を読んで開眼して自らの学問を發明したので。それが正風俳諧である。老子莊子を合わせると老莊思想というが、その根本思想は、「道」である。これは「物有り渾成こんせいし、天地に先んじて生」じた状態。つまりまだ天も地も生まれておらず、渾然としてはいえるものの何物かがあるような状態です。逍遙遊しょうようゆう篇では、「無何有むむかうの郷きょう」とも表現している。「何も有ることなき郷」、何も無い、物が現れて

いない、時間も生まれていないし空間も生まれていない広漠の野ということです。時間が生まれていないということとは、音もないということです。不易流行の不易のところ、「造化したがひて四時を友とす」の造化である。自然である。

此の道や行く人なしに秋の暮

の道がこれである。無為自然というのも老荘の哲理である。とにかく儒学が盛んになった時代に芭蕉はそれと全く違う荘子に出会ってこれだと自得したのだ。

野ざらし紀行の  
猿を聞く人捨子に秋の風いかに

はなんと薄情なと思うのは現代の能天気である。老荘の道を知っている芭蕉は云ってみれば聖人である。聖人は仁せずというのが老子の思想である。猿の声を聞いて断腸の思いをうたった詩人たちよ。富士川の急流の河原で冷たい秋風に吹かれながら泣くこの捨子の声をなんと聞くか。仁を施さずつまり命を助けることもせず通りすぎてしまった。これはおそらく紀行文のフィクションである。それがこの世の実。俳諧の世界では、何もせずに通り過ぎるのだ。既に言わんとすることが見えているでしょう。

莊子妻死、恵子弔之、莊子則方箕踞鼓盆而歌。恵子曰…「與人居長子、老身死、不哭亦足矣、又鼓盆而歌、

不亦甚乎！」莊子曰…「不然。是其始死也、我獨何能無概然！察其始而本無生、非徒無生也、而本無形、非徒無形也、而本無氣。雜乎芒芴之間、變而有氣、氣變而有形、形變而有生、今又變而之死、是相與為春秋冬夏四時行也。人且偃然寢於巨室、而我嗷嗷然隨而哭之、自以為不通乎命、故止也。」これは莊子の妻が死んだ時恵子が之を弔った時の話である。

「莊子則ち方まさに箕踞し盆を鼓し而して歌う。恵子曰はく、人と與ともに居りて子を長ぜしめ、身老ひしめ死す、哭せざるは亦足れり、又た盆を鼓して歌ふは、亦甚だしからずや！」莊子曰はく「然らず。是れ其の始めて死するや、我獨り何ぞ能く概然ならんや！其の始めを察するに本より生無く、徒だに生無きのみに非ずして、本より形無し、徒だに形無きのみに非ずして、本より氣無し。芒芴ばうつの間に雜まじはりて、變じて氣有、氣變じて形有り、形變じて生有り、今又、變じて死に之くのみ。是れ相あい與ともに春夏秋冬の四時の行かうを爲すなり。人且に偃然として巨室に寝ねんとするに、而も我、嗷嗷きようきよう然として、隨ひて之を哭するは、自ら以て命に通ぜずと爲す。故に止めたるなり。」と。すると莊子は両足を投げ出して座り、土の瓶を叩きつつ歌を唄っていた。恵子は「夫婦として共に暮らし、子どもを育て老年になったのである。その相手が

死んだのに、泣き叫びもしないのは、それだけでも不人情といえるが、更に瓶を叩きながら歌を歌うとは、ひどい振る舞いではないか」と責めた。莊子はこう答えた「そうではない。死んだ直後には、私だつて悲しみを抑えられず泣かずにはいられなかった。ただ人の始まりを考えてみるに、元々は生命は無かったのだ。生命が無かっただけではいい。元々は形さえなかったのだ。形がなかっただけでない。もともと気さえなかったのだ。混沌と朧<sup>おぼろ</sup>でとらえどころの無い状態であつたものから、やがて変化して気が生じ、気が変化して形ができ、形が変化して生命が出来た。そして今また変化して死の状態へ帰っていくのだ。これは春夏秋冬の四季がめぐるのと同じことを繰り返しているのだ。人が大きな天地の中で安らかに眠ろうとしているのに、私がそれを追いかけ、大声を張り上げ泣き叫ぶのは、自分ながら運命の道理に通じず逆らうことだと思ふ。そこで泣く事をやめて歌を唄つたのである。

私達現代の高齡化社会を生きているものにとつて右の莊子は余りにもきついと思うかも知れないが、一方で安心立命を与える思想でもある。又李白を読んでいた芭蕉は、李白の「内<sup>うま</sup>に贈る」の詩も踏まえて作り変えたのだろう。

内贈 李白

三百六十日

日日醉如泥

雖爲李白婦

何異太常妻

三百六十日

日日 酔うて泥の如し

李白の婦と爲ると雖も

何ぞ太常の妻に異らん

「二年三百六十日、毎日泥のように酔つ払っている。李白の嫁になつたといつたつて、これではお前、太常の妻とかわからないね。泥はドロではなく、南方の海にいたとされる軟体動物の泥<sup>い</sup>のこと。海中では自由に動き回るが、陸地になるとグツタリしてしまうことから、酔つ払いの例え。今日「泥酔」という言葉がありますが、あれの語源です。「太常」は、宮中で皇帝の先祖を祭る神主のことです。後漢時代、周澤という太常職の男がいました。この周澤がある時病氣になり、廟内で休んでいました。そこへ妻がお見舞いに来ます。しかし、周澤は怒り狂います。「お前のせいで、神聖な場が穢れてしまった。どうしてくれるんだ」「そんな、私はあなたのために……」「やかましい。」とうとう周澤は妻を捕えて牢屋に入れてしまいました。これじゃあ奥さんはむくわれません。ひどい話です。李白はこの故事をふまえ、ユーモアまじりに言っているのです。いつも酒ばっかり飲んで、家を空けて、すまんなど。また奥さんのほうも、こんな高度なたとえが理解できにくらいなので、よほど学問のあつた女性なのでしょ

う。数ならぬ身とな思ひそ玉祭、物があつて生と死は同一のものである。死はただ本体に戻ることでというのが莊子の説なのだから。歌の実に生きた芭蕉は實際の世の中を生きた芭蕉とは断絶があつて同一ではないと思えばすべてが理解できる。芸術と云うものは皆そうなのではないでしょうか。梅原龍三郎の富士山の絵を見て実富士山と思う人はいないでしょう。それと同じです。老莊の道という概念は、どうも現代の宇宙創成の無であると私は考えます。今の物理学は二千年余り前の思想を科学的に追っているに過ぎないのかもしれない。精神は進歩していないようです。(H28.8.26)

# 我孫子日記

7/15	例会
7/24	藕糸蓮
* 8/9	福山
*2 8/10	竹工芸展
*3 8/12	利根親公園
*4 8/19	上野

\*抜きんでて花卉開く藕糸蓮

そつぽ向く向日葵はなし根戸新田

\*2 猛暑の熱籠る新幹線ホーム

スマホにてハイジのじいちゃんと云はれ

\*3 ホテル出て熊蟬の声懐かしき

芸術家一家の真夏よい暮し

千鳥編晩夏と名づけ綾やあり

高志  
" " " " " "

握手して百寿掌<sup>てのひら</sup>柔らかし

\*4 蓮の実の台<sup>うてな</sup>の乾き天を向く

目高は水面に蝌蚪は水底に

糸とんぼ草の葉先にすぐ止まる

雲の峰田圃の中の鉄工所

水尻り群がる目高よく見える

泥けむり立てて消えたり蝌蚪の群

## 編集後記

今月は句会を休みましたが、会報はこれだけの便りや昭七さんの連載版・私の閑話で12頁になりました。便りを頂いた方々にも本誌を送りました。句会を休んでも俳句生活は休めないと覚りました。

扱、台風シーズンになり、薩摩芋、里芋などは雨と日照りでどんどん伸びています。15日が十五夜、16日が例会、10月7日は駒場の近代文学館の吟行、10月尽と11月1日は法隆寺と予定が着々参ります。裏表紙の案内版を曆に書き込みどうか気を入れてお出かけ下さるようここでお願いして後記と致します。

" " " " " "

白金霞8月号(第66号)平成28年8月発行  
編集・発行人 光成高志…(〇四一七一八七一〇六八)  
発行所 270・1119 我孫子市南新木2・14・17

表紙の題字…加納綾女。写真…8月27日の白金霞